

平成电脑版

# 三ノ丸「レの櫓」復興案

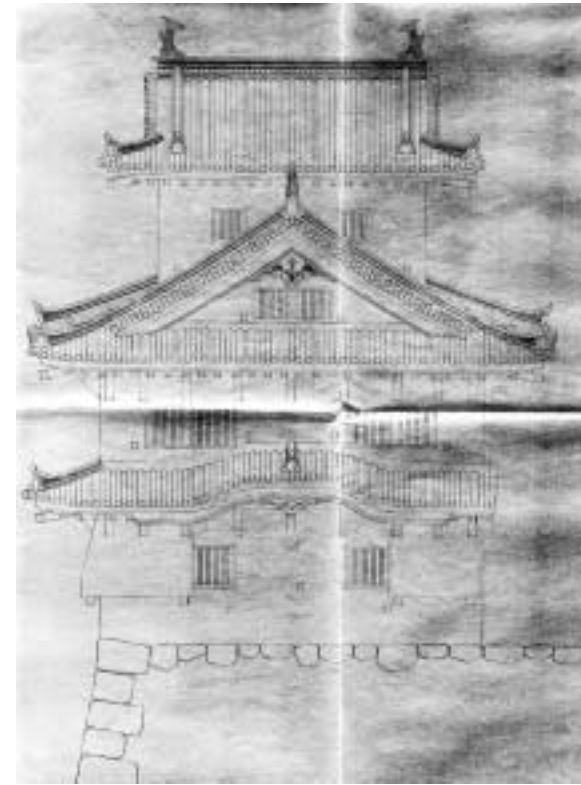


現在、特別史跡における建物の復原には、一次史料としての指図や古写真、考古学的データが不可欠とされる。それからすると、姫路城の場合、三ノ丸当該地における櫓群の復原は現時点では難しいし、たとえ必要な史料が揃ったとしても「世界遺産・国宝」を戴くからには、その時の勢いだけでやってしまうという軽率さも許されまい。

しかし、現地に建物が建たずとも、マルチメディアの世界ではそうした「復原」がいまや可能となった。幸い、右のような設計図が資料に含まれていたのも、それをもとに現在の三ノ丸石垣上にパソコンで「夕の櫓」を「復原」してみたのが、上の図である。

三重櫓一棟では寂しいかぎりだが、この両脇に土塀や二重多聞櫓が連結されることを想像して見ていただきたい。南の方から眺めた場合、白亜で目立つ天守を頂点にして腰高の姫路城も、幾分腰を落として安定感のある景観になったことに違いない。

姫路市職員の描いた三ノ丸復興計画



「夕の櫓」立面図（上が南面、下が西面）

ともに本来は1/50の青焼陰画。色調反転させて掲載している。図面には「夕の櫓」と裏書されているが三ノ丸西南隅だからレの櫓の誤りであろう。前ページのグラフィックはこの図面をもとに起こした。60年前の計画が実現されていれば、写真中の石垣上を多聞櫓や土塀が巡り、現在とは異なった景観を楽しめたことだろう。

今回紹介した資料では、姫路城に関する建物でかなり具体的な姿を描いたものは、「桜門」とこの夕の櫓だけである。外観は恐らく小天守をモデルにしているのだろう。



## 三ノ丸復旧計画が語るもの

断片的な資料から判断するのは危険が大きいですが、この資料を通覧して気づいた点を記しておきたい。

建物の設計図については、当時の建築技師が画いているとみて間違いのないだろう。その際、酒井家資料に直接触れて設計の参考になっている痕跡があったことは、当時の担当者には失礼であるが意外であった。さすがに外観は苦労したとみえ、既存建物の姿を借りてきているものの、最近見つかった絵図等と見比べても、そう隔絶したものでもなく、建築技師のセンスが窺われる。

また図面は青焼がほとんどである。本来の原図が市役所のどこかにあった（ある）はずである。事務文書については原本とみられる綴が含まれており、明らかに市もしくは関係者が出所であろう。決まりでは保管年限を過ぎれば廃棄可能な文書は多いだろうが、それは将来、重要な歴史資料になる可能性を秘めていることを再認識させられた。

城郭研究室のURL

<http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuker/>

"Shiro Fumi" No.13 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.



「城踏」の様子